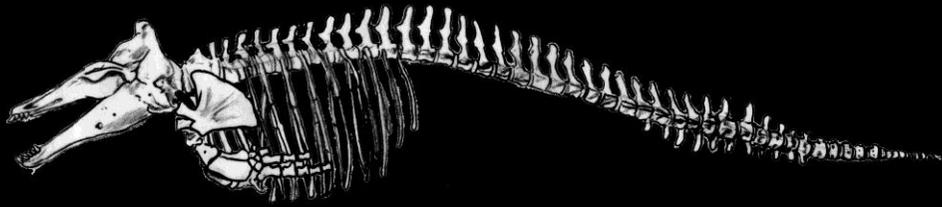


自然遊学館だより



マゴンドウ *Globicephala macrorhynchus*

Makiko Nishizawa

◆ 2005 WINTER (No. 34)

◆行事レポート◆

- 自然生態園作業と鳴く虫の声を聞く会 … 1
- 近木っ子探検隊 箱谷川の生きもの … 2
- 葛城山山地美化キャンペーン … 4
- たわわの里・池さらい … 5
- 化石採集 … 5
- トンボの池干し … 6
- 館長と科学あそびをしよう … 7
- 地引き網漁の体験に行ってきました! … 8

◆いきものよみもの◆

- へびのぬけがら … 9
- 【泉州生きもの歳時記】
- ツキヨタケ … 10

◆投稿◆

- カマキリから出たハリガネムシ … 11
- ◆寄贈標本紹介◆ … 11
- ◆Information◆
- 自然遊学館スタッフの日誌より … 12
- 近木川写真展（浜手公民館） … 13
- 特別展「貝塚の植物 食用・薬用」 … 13
- 大阪府「私の水辺」大発表会 … 13

2005. 01. 05 発行：貝塚市立自然遊学館

Kaizuka City Museum of Natural History

◆行事レポート◆

自然生態園作業と鳴く虫の声を聞く会

場所：市民の森自然生態園

日時：2004年10月10日 13:00～20:30

まずは午後1時から自然生態園トンボの池で、池そうじとヤゴ調査。池に入ったのは岡田恵司さんと大川内幸三さんの2名。採集時間は15分。他の約10名で、引き上げたアオミドロからヤゴを仕分ける作業をしました。ヤゴの天敵のザリガニは14個体。ヤゴの個体数はクロスジギンヤンマ 76、ギンヤンマ 20、シオカラトンボ 3、アオモンイトトンボ属の一種 3 でした。ギンヤンマ属の2種について、体長4cm程度の大型のものはクロスジギンヤンマ、体長1～2cmの中型のものと0.5cm未満の白黒縞もようのものはギンヤンマでした。クロスジギンヤンマの方が発育が早いのは、いつもと同じ結果でした。他にコマツモムシの成虫を採集しました。

次は午後4時からバッタの原っぱでバッタ調べ。岡田真太郎君がケラの幼虫を採集。これはバッタの原っぱでは初記録です。写真はケラの右前脚を外側から見たものです。地中にもぐるためにシャベルのような形をしています。9名で1時間ほど採集を行い、ホシササキリ、マダラスズ、シバズ、ハラオカメコオロギ、ツヅレサセコオロギ、エンマコオロギ、マダラバッタ、イボバッタ、オンブバッタを捕えました。他に、マイコアカネ、アオイトトンボ、ハマベアワフキ、セアカヒラタゴミムシ、サビキコリ、セアカゴケグモが採集されました。



ケラの右前脚

またまた次は午後7時から河合正人さんを講師に迎えて鳴く虫の声を聞く会。参加者はスタッフを含めて10名(+ネコ1匹)。休憩コーナーで河合さんから夕方の採集物の説明、鳴き声を出す仕組についての説明を受け、さらに鳴く虫それぞれの棲み場所を教わり、市民の森へ。ミツカドコオロギ、ヒロバネカントン、アオマツムシ、カネタタキといった夕方の調査で採集されなかったものの鳴き声が聞かれました。エンマコオロギの音が一番大きい：ハラオカメコオロギとミツカドコオロギの鳴き声は何べん聞いても紛らわしい：シバズとマダラスズの鳴き声はするも、ツヅレサセコオロギの鳴き声は聞かれません。その他では、ツユムシが採集されました。参加者の家藤君は本当に虫が好きなようで、しかも夜目が利き、懐中電灯だけで次々に鳴く虫を採集していきます。

途中、トンボの池周辺で聞きなれない鳴き声。参加者全員で捜索するも見つからず。あきらめて次のポイントへ進んでいる最中、一人あきらめずに池のほとりで獲物を狙っていた山田浩二学芸員が何かをゲット。自然生態園初記録のウスイロササキリでした。これは河合さんが採集前の説明の中で「ホシサ

サキリがいるのなら、これもいいのに」と言っていた種です。山田学芸員は9月下旬の千石荘での行事でマツムシを採りそこなった汚名を返上。さらにアオマツムシの採集にも成功し、参加者から喝采を浴びていました。1時間ほどの採集のあと、休憩コーナーへ戻り、採集物の確認、見分け方、それぞれの種の生活史や飛翔能力についての話をつかがい、次にどういう鳴く虫が市民の森にやってくるのだろうかと話しました。

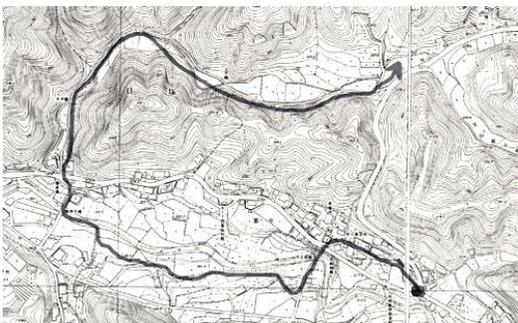
(岩崎 拓)

近木っ子探検隊 箱谷川の生きもの

場所：蕎原箱谷

日時：2004年10月23日 10:00～14:30

秋晴れの空の下、蕎原地区から箱谷を歩くハイキングが行われました。蕎原バス停を出発し、近木川沿いの田んぼや畑をとおって、箱谷の林道を抜けるコースです。



当日のルート

蕎原会館に向かって歩いていくと、大きなアサギマダラが目の前を横切りました。アサギマダラは鳥のように「渡り」をすることで有名なチョウです。春から初夏にかけて北上し、秋に東北地方から関東～東海～紀伊半島を経て南西諸島、台湾へ南下するルートが知

られています(『旅をするチョウ アサギマダラ』, むし社, P2 参照)。この日みた個体も、移動の途中だったかもしれません。

刈り入れ後の田んぼにはぼかぼかと暖かい日が射し、シマヘビやニホンアマガエル、ヤマトシジミやショウリョウバッタなどの昆虫が活発に動き回るのを見ることができました。標高の高い場所で夏を過ごし、成熟したアキアカネが里に下りて飛びかうのもこの季節ならではの光景でした。

ヤマノイモのつるにできた「むかご」を採集したり、おいしい実がなるアケビ(葉が五枚)と葉が三枚のミツバアケビを見比べたりしながら箱谷に移動しました。田や畑には、イヌタデがきれいでしたが、箱谷の林道では、ハナタデ、ミズヒキが道沿いにずっと咲いていました。林道がきれ、道がひらけてくると、コウヤボウキの花が満開でした。

お弁当を食べたあと、同じ時期に自然遊学館が行っていた野ネズミ調査の様子を観察。その後タモ網で川の中をすくいながら生きもの調べ。ゲンジボタルやニシカワトンボなどの水生昆虫や、カワムツ、カワヨシノボリ、ミナミヌマエビなどの水生動物を採集しました。

箱谷のカキの木にはさっそくテンがやってくるらしく、木の周りにカキの種や皮の入った細かいフンが落ちていました。このフンには、アカケシガムシがたくさん集まっていました。

観察した植物

きく科：ヨメナ、ノコンギク、タカサブロウ、アメリカセンダングサ、ダンドボロギク、ヒヨドリバナ、ヤクシソウ、ノコンギク、ハキダメギク、コウヤボウキ、シロヨメナ、アキノキリンソウ、セイトカアワダチソウ

うり科：カラスウリ

あかね科：アカネ

おおばこ科：オオバコ

なす科：アメリカイヌホオズキ

しそ科：アキノタムラソウ、イヌコウジュ

とうだいぐさ科：エノキグサ

ふうろそう科：ゲンノショウコ

まめ科：コマツナギ、タンキリマメ

ばら科：キンミズヒキ、ビワ

あけび科：アケビ、ミツバアケビ

なでしこ科：ウシハコベ

ひゆ科：ヒナタイノコズチ、イヌビユ

たで科：イヌタデ、ミゾソバ、サクラタデ、ハナタデ、ミズヒキ

いらくさ科：カラムシ

くわ科：クワクサ

やまのいも科：ヤマノイモ

つゆくさ科：ツユクサ

いね科：メヒシバ、キンエノコロ、ススキ

観察した昆虫

(トンボ目) アオイトトンボ、アキアカネ、ウスバキトンボ

(バッタ目) セスジツユムシ、ササキリ、オナガササキリ、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、シバズ、マダラスズ、クサヒバリ、カネタタキ、オンブバッタ、ショウリョウバッタ、トノサマバッタ、ツチイナゴ

(カマキリ目) オオカマキリ、コカマキリ

(カメムシ目) ツマグロオオヨコバイ、オオヨコバイ、セジロウンカ、アオバハゴロモ、アカスジカスミカメ、ヨコヅナサシガメ、マルカメムシ、アオクサカメムシ、ヒメクモヘリカメムシ、クモヘリカメムシ

(コウチュウ目) ナナホシテントウ、ヒメツチハンミョウ*、クロウリハムシ、アカケシガムシ*

(ハエ目) ホソヒメヒラタアブ、ツマグロキンバエ(チョウ目) キチョウ、モンシロチョウ、アサギマダラ、ツマグロヒョウモン、ヤマトシジミ、ウラギンシジミ

(ハチ目) キンケハラナガツチバチ、キボシアシナガバチ、ヒメアリ、アミメアリ、トビイロケアリ、セイヨウミツバチ

* ヒメツチハンミョウは、自然遊学館所蔵標本になかった種。テンの糞にいたアカケシガムシは北海道大学総合博物館の澤田義弘博士に同定していただきました。

観察した水生昆虫

チラカゲロウ、ヒラタカゲロウ科の一種、ニシカワトンボ、オニヤンマ、シマアメンボ、ゲンジボタル、ガガンボ科の一種

観察した両生類

ツチガエル、ニホンアマガエル、ニホンイモリ

観察した爬虫類

シマヘビ、ヤマカガシ(交通事故死体)

この日は市内の小学校の参観日と重なったために、参加者は13名とやや少なめでした。ですが、参加したみなさんはじっくりと生きものを観察しながら秋の一日を楽しんでいました。

(湯浅 幸子・西澤 真樹子)

葛城山 山地美化キャンペーン

場所：和泉葛城山

日時：2004年11月14日 10:00～15:00

参加者 55名

下見も本番も好天にめぐまれ、気持ちのいい登山だった。Bコースの難点は、登り出すといきなり急坂が連続すること、緑の少年団の子どもたち(中でもふっくらした子どもたち)も息が荒い。

年配の方々は、PLの塔が見渡せる地点で小休止をとるとき「こんなん続いたらもうあかん！」と悲鳴。が、このあたりのウバメガシ樹林はいつ来てもみごと、すばらしい。コウヤボウキやサルトリイバラ、ヤブコウジなど周囲にあるなじみの植物を説明。

再び登り始め、枇杷平で遅刻組も合流して休憩。ネジキとコナラとウバメガシを参加者に覚えてもらう。ここからは子どもたちは一目散に頂上を目指し、風流を解する人たちは、秋の山の風景を楽しみながらの登山。イロハカエデ、ウリハダカエデ、コハウチワカエデとカエデと種類が変わってゆくが、赤系黄色系の愛らしさ抜群、立ち止まっては空を仰ぐ。下方にはミヤマシキミ(ツルシキミ)の群落が続くが、蕾が少し、実は見られない。玉冷泉付近のスギの腐った切り株に、死者が出て話題のスギヒラタケが見られた。下見の時は乳白色が美しかったが、すでに黄みを帯びている。新聞紙上では、スギヒラタケに、水に溶解熱に強い致死性物質が確認されたそうだ(朝日新聞 04. 11. 29)。

最初の展望台からブナ林を眺める。色とりどりの落葉樹の中に、ひときわ目立つ常緑の

大木、あとでアカガシだと上久保前自然遊学館長に教えてもらった。

下山はBコース。散策道でブナ林を堪能し終わった頃、ブナの枯死大木につくツキヨタケの群生を見た。光る様を見たいものだと誰もが口にしていて。このコースのミヤマシキミは赤い実をつけている株が多く、参加者から歓声があがった。

最初のきつい登りや、下山終盤の長い下り坂は、老いの身に辛かったが、ゴミを拾うことなど殆どない、葛城山はやはり魅力的だ。

観察した植物

ぶな科：ウバメガシ、コナラ、アカガシ

ばら科：フユイチゴ

くすのき科：クロモジ

きく科：コウヤボウキ

ゆきのした科：クサアジサイ、ヤマアジサイ

とうだいぐさ科：シラキ

みかん科：ミヤマシキミ

かえで科：イロハモミジ、ウリハダカエデ、コハウチワカエデ

りょうぶ科：リョウブ

つつじ科：ネジキ

やぶこうじ科：ヤブコウジ

きょうちくとう科：テイカカズラ

ゆり科：サルトリイバラ

しそ科：ミカエリソウ

いね科：ミヤコザサ

さといも科：マムシグサ実

いわたばこ科：イワタバコ

観察したキノコ

キシメジ科：スギヒラタケ、ツキヨタケ

(白木 江都子)

たわわの里・池さらい

場所：たわわの里

日時：2004年11月23日 10:00～15:00

参加者：65名

農事組合法人「奥貝塚・彩の谷」、大阪府泉州農と緑の総合事務所、貝塚市農林課の関係者と、彩農園からも数組のご夫婦がボランティア参加、総勢80名ほどで顔合わせ。自然遊学館の行事関係者には農事組合から、みかんの差し入れをいただいた。

業者の方がポンプで水抜きを開始、同時に池の計測をすると、17.5m×14.8m、水深は65cm、うち泥が40cmだった。

参加者は岸边から思い思いに網を入れて生きものを探し、山田浩二・山田量崇・向井康夫・寺田拓真が胴長を穿いて池の中に入って採集、岩崎拓は岸边で同定を担当した。水中にも泥の中にもスジエビがいっぱい、ときおりシオカラトンボなどのヤゴが出てくるが、とにかく泥との戦いで、足をとられてロープで引っ張りあげてもらった人もいた。

池の中の胴長組がバケツで泥をすくいあげ、リレーで池の周りに泥を出してゆく。出された泥の中から生きものを救出する係りも泥だらけ。終了時には園内を流れる川へ行き、汚れた手足と道具を洗った。



同定した生物

- オニヤンマ 1
- フタスジサナエ 2
- エゾトンボまたはタカネトンボ 3
- シオカラトンボ 28
- シオヤトンボまたはオオシオカラトンボ 21
- ショウジョウトンボ 3
- ヒメミズカマキリ 3
- ハイイロゲンゴロウ 多数
- マメゲンゴロウ 3
- オオユスリカ 2
- イトミミズ 2
- スジエビ 多数
- アメリカザリガニ 96
- ウシガエル 5

他に、マツモムシ・コマツモムシ・チビミズムシ・ドブガイ死殻・ヒメタニシ

(白木 江都子)

化石採集

場所：蕎原箱谷 (和泉層群)

日時：2004年11月27日 10:00～15:00

例年は真冬に行い人気を博していた観察会ですが、何も寒さに凍える手でハンマーを振ることもないのではとのことで、今年はまだ本格的な寒さの到来しないこの時期に行いました。講師には例年通り、和泉鉱物研究会の高田雅彦さんに来ていただき、本日の参加者50名に対し、解説をしていただきました。じかに露頭の岩盤をたたくのは崩落の危険性があるということで、すでに箱谷古生物研究会の加藤守さんたちが崩しておいて下

さった岩石を拾ってはハンマーでたたく作業でした。



現在では絶滅した二枚貝のナノナビスの化石、ゴカイや甲殻類などの巣穴と思われる化石、泥岩のかたまりであるノジュールが相次いで発見される中、アンモナイトの異常巻き（ノストセラスか、ディプロモセラス）も発見され、高田講師も少々興奮気味でした。

各自採集した化石は、約7千万年間もの長い間、地面で眠っていたものを掘り起こした貴重な資料だということを知ってもらい、きちんと採集場所・採集日などをラベルに記録してから、持ち帰って頂きました。

(山田 浩二)

トンボの池干し

場所：自然生態園 トンボの池

日時：2004年12月11日（土）10:00～15:00

自然生体園のトンボ池の底に溜まったゴミや植物の掃除と、池の中にいる生き物の種類や個体数を調べるために、トンボの池の水抜き作業を行いました。池の中にはアオミドロが繁茂しており、池にいる生き物を探すのはなかなか大変でした。総勢33名で、ヤゴ

を入れておく水槽をつくる係、池に入ってアオミドロをすくう係、アオミドロからヤゴを分ける係、ヤゴや水生昆虫の種名を調べる係などに分かれて、作業を行いました。



以下に、救出した生きものの種名（個体数）を示しました。

トンボの池にいたヤゴ

アオモンイトトンボ属 (9)、ギンヤンマ (39)、クロスジギンヤンマ (66)、マルタンヤンマ (17)、シオカラトンボ (81)、ショウジョウトンボ (3)

ヤゴ以外の水生昆虫

フタバカゲロウ属 (1)、マルミズムシ (1)、コマツモムシ (80)、マツモムシ (2)、ハイイロゲンゴロウ (9)、チビゲンゴロウ (1)、チャイロチビゲンゴロウ (2)

水生動物

アメリカザリガニ (358)、スジエビ (18)、ヒメタニシ (11)、ハブタエモノアラガイ (7)、ヒラマキミズマイマイ (1)、イシビル科、イトミミズ科（水生動物の同定：山田浩二）

ヤゴの個体数を前年と比較すると、ギンヤンマとクロスジギンヤンマが少し増えたのに対して、アオモンイトトンボ属とショウジョウトンボが激減、マルタンヤンマとシオカラトンボはほぼ変わらずという結果になりました。

ヤゴの数当てクイズ、ザリガニ採りの採集数上位者には、特別賞が贈られました。捕まえたアメリカザリガニの一部は参加者の方が持ち帰り、残りは自然遊学館で飼育しています。また、ヤゴは全てシェルシアター内に設置した3つの野外水槽で、クロスジギンヤンマ、ギンヤンマ+マルタンヤンマ、その他の水生昆虫に分けて飼育しています。1月中旬頃トンボの池に戻す予定です。

12月16日に再び底にたまった水を掻き出す作業をした時に、シオカラトンボ(4)、ハイロゲンゴロウ(4)、アメリカザリガニ(20)、ヒメタニシ(4)を採集しました。

(岩崎 拓)

館長と科学あそびをしよう

～銀色・金色メッキでブローチを作ろう～

場所：自然遊学館多目的室

日時：2004年12月19日(日)14:00～16:00

今回は参加応募者が当日まで2名と大変心細く、寂しい思いをしていたところ、当日になって申し込みがあつて参加者が7名となり、体裁を保つことが出来た。12月も押し詰まると何かと忙しいのだろう次年度の反省としたい。今回の内容は銅線を使いこれに亜鉛メッキをほどこし、銀色とし、さらに

これを熱することにより、亜鉛と銅の合金を作り、金色とするというものです。子供たちにはまだイオンや電子の移動などは理解困難なため、変化の面白さだけを知ってもらうことにした。強酸に亜鉛を溶かした液を使うためもあり、いつものことであるが実験の心得を十二分にし、作業にかかる。ブローチのため形が大切、館内を見て回りトンボにしようかチョウにしようかいやカブトムシかと迷いつつも皆それぞれ良い形を考え出した。ペンチを使つての慣れない作業で一時はどうなることかと心配もしたが金色、銀色を楽しみ自分やお母さんへのお土産を作り、にぎやかな楽しい実験と作業となった。



(福本 泰承)

地引網漁の体験に行ってきました！

～大阪府子どもエコクラブ交流会～

場所：尾崎漁港・福島海岸

日時：2004年10月30日(土)

大阪府下の子どもエコクラブの集まる交流会が今年は「大阪湾を大切にしよう！」をテーマに泉州で行われ、貝塚市からも「近木っ子探検隊」のサポーターを含め9名が参加

しました。朝からぐずついた空模様の中、阪南市の尾崎漁協共同組合事務所に集合しましたが、はじめの挨拶が終わる頃には運良く雨も上がってきました。早速、港に出て漁師の方から地引網漁の説明をして頂いた後、港に隣接する福島海岸の砂浜で、まずは浜辺にたくさん打ちあがっていたゴミ拾いを行いました。そして、いよいよみんなが楽しみにしていた地引網漁の体験です。船で沖出しされた地引網を二手のロープに分かれ、綱引きの様にみんなで引っ張りました。じょじょに網が岸边にたぐり寄せられ、網の中の魚が跳ねる姿を見たときは、歓声が上がりました。網に入った漁獲物をおけに移すと皆がわっと取り囲み、スズキ、マダイ、アジ、ホウボウ、アナゴ、タコ、ガザミなどの姿に子供たちは、大いにエキサイトしていました。この1回の地引網で本当にこんなたくさん様々な魚が掛かったのかどうかの真偽の程は別にして、子供たちにとって大阪湾で昔ながらの地引網漁が体験できたことに価値があったと思います。



地引網を引っ張る様子

お昼ご飯の際は尾崎漁協さんのご好意で、茹でたてのシャコと鯛の刺身、ガザミの味噌汁をふるまってもらい、大阪湾の海の幸をたらふく食べさせていただきました。その後、午後からは雨になり、各エコクラブの活動紹介、漁師さんのプチ講演、全員参加の室内ゲームを行いました。

この行事を通じて他のエコクラブ員と知り合いになり、さまざまな活動内容を紹介しあったことは、今後に向けて大いに刺激になったようでした。

(山田 浩二)

「この行事に参加して本当に良かった！」と思った事…ごちそうを頂いたのもそうですが…なんと言っても各クラブの活動紹介の事です。高野朝子ちゃんが作ってくれた壁新聞を前に子ども達がマイクを回しながら一生懸命発表しました。さすが！近木っ子探検隊はリハーサルなしでもチームワークばっちり！発表態度も良かったし、朝ちゃんの壁新聞の内容も素敵で感動しました。お腹もココロも満足のうれしい一日でした。

(岡田 尚子サポーター)

◆いきものよみもの◆

ヘビのぬけがら

イモリ、サンショウウオ、カエルなどの両生類や、ヘビやヤモリなどの爬虫類は脱皮をして大きくなります。両生類は脱皮をしたあと皮を食べてしまうことが多いので、あまり野外で見ることはありませんが、ときおり脱皮がはじまって背中に白い筋の入ったヒキガエルなどを見ることがあります。また、爬虫類でもトカゲの皮はバラバラに、ヤモリの皮は日焼け後の肌のようにめくれて落ちてしまうので、ほとんどの人は「いつのまに大きくなっているの?」と思っているのではないのでしょうか。

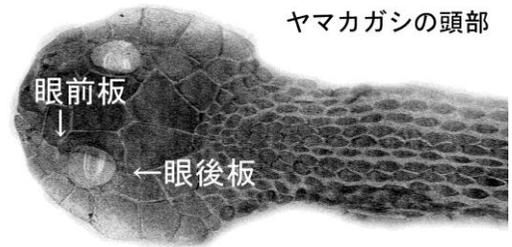
さて、その中でもヘビの皮はしっかりとしたぬけがらで残るため、昔から「お財布に入れるとお金がたまる」とか「幸運を呼ぶ」などといわれて知られてきました。今回は行事で見つけた2種類のぬけがらを紹介します。



シマヘビのぬけがら。太いしまが見える

上の写真がシマヘビのぬけがらです。目の部分はやや硬い透明なカプセルのようになっており、目の部分の皮も脱ぐということがわかります。また、くつきりとしたしま模様があり、シマヘビの特徴が出ています。

つぎの写真は蕎原の畑のあぜに脱ぎすてられていた、ヤマカガシのものです。ぬけがらの長さをはかったところ、120cmほどあり、こんなに大きいヤマカガシがいるのかと最初はびっくりしたのですが、よく調べてみると脱皮するときに鱗と鱗の間がのびるため、実際よりもぬけがらの方が大きくなるのだそうです。



ヤマカガシのぬけがら

ヘビのぬけがらの面白いところは、生きているときにはあまり見られない体のようすをじっくり観察できる点にあります。ヘビは、色や模様だけでなく、鱗の並び方や数などで種類をみわけます。とくに特徴が出るのが目のまわりの眼前板や眼後板と呼ばれる部分(写真の白い矢印)で、ここが一枚か二枚か、またどんな形をしているか調べるのです。また「体鱗列」は背中の鱗を数えて出す数字で、この日ひろったぬけがらは19枚でした。ここまではシマヘビと一緒にですが、眼前板が2枚、眼後板が3枚であるなどの特徴からヤマカガシとわかりました。

みなさんもぬけがらを見つけたら、自然遊学館で調べてみましょう。



行事で観察されたシマヘビ

(西澤 真樹子)

【泉州生きもの歳時記】

ツキヨタケ 月夜茸

ハラタケ目キシメジ科。晩秋にブナの枯木や倒木に生えるキノコです。写真(図1)は2004年11月3日に和泉葛城山山頂付近のブナの立枯れにびっしりと密生していたものです。



図1. ブナの立枯れに生えていたツキヨタケ

食用となるシイタケ、ヒラタケ、ムキタケに似ていますが、このツキヨタケは毒キノコ

で、誤って食べると、嘔吐や手足のしびれで数日間苦しむこととなります。柄の部分割ると黒いシミがある点(図2)、および暗闇で発光するという点で、他の食用となるキノコと区別できるそうです。



図2. ツキヨタケの断面

人間にとっては「毒」でも、一部の甲虫にとっては「餌」となり、キイロセマルケシキスイが傘の裏側のひだの部分に多数もぐりこんでいました。その他にキノコの表面で確認した昆虫は、ニセオオキバハネカクシ属の一種とオオハリアリです。

写真撮影をしている最中ずっと、立枯れの材の中に餌を探すコゲラがコツコツと音を立て、木屑をぼろぼろと落としてきました。生命としては終わりを迎えつつあるブナの立枯れですが、まだまだ他の生きものにとっては利用可能な「資源」となっています。

(岩崎 拓)

◆投稿◆

カマキリから出たハリガネムシ

2004年10月11日に、馬場のたわわの里周辺で採集したハラビロカマキリとヒメカマキリの腹部の先端を水につけて、ハリガネムシが出てくるかを調べました。その結果を報告します。

ハラビロカマキリ 3 個体採集

個体 A. 30cm の黒色のハリガネムシが脱出

(10月12日ギャラリーを集めて実験)

個体 B. 脱出なし

個体 C. カマキリが脱走

ヒメカマキリ 2 個体採集

個体 A. 10.5cm の黒色のハリガネムシが脱出

個体 B. 8.5cm と 8.3cm の色の薄いハリガネムシが 2 個体脱出

(10月11日午後9時ごろ)

カマキリはハリガネムシが脱出した後、すぐに死んでしまうこともあれば、1日以上生き延びることもあるようです。ハリガネムシの生態は考え出すと面白いテーマです。

- ・いつ、どうやって、寄生するの？
- ・バッタには寄生しないの？
- ・腸が傷ついて死んでしまうの？
- ・色の薄いハリガネムシは柔らかいから、寄主へのダメージが小さい？
- ・水辺が近くないところのカマキリは寄生

率が低い？

- ・なぜハラビロカマキリに多いんだろう？
- ・オオカマキリへの寄生率って本当に低いのかな？

などなど、今年の秋はカマキリにはまって調べてみたいと思います。

(浅井 真紀子)

◆寄贈標本の紹介◆

以下の方々より標本の寄贈をいただきました。お礼申し上げます。

◆森本静子さんより

安威川支流下音羽川産 ハリガネムシ 1 点

◆橋本貴美子さんより

貝塚市貝塚市役所産 キジバトの卵 1 点

◆三輪健一郎さんより

和泉市産 ドジョウ、カワニナ数点

◆食野俊男さんより

貝塚市二色浜海浜緑地産 キュウセン 2 点、

アイナメ 2 点、ホンベラ 1 点

※展示水槽で展示中

(※2004年12月分まで)

★自然遊学館スタッフの日記より★

自然遊学館で起きたいろいろな出来事を
トピックスでお伝えします。

10月23日～25日 春に続いて、蕎原の箱谷と名越の千石荘で哺乳類調査を行いました。シャーマントラップという生け捕りわなをしかけ、中に入った野ネズミなどの動物を調べる調査です。特に秋から冬にかけては、つかまった動物が寒さで弱ったり死んだりしないよう、夜間数回の見回りを行います。

24日夜、一回目の見回りをするために大川を出発したときのことで。19:40、ヘッドライトの前に白くてふわりとした姿がうつりました。「あ、フクロウ！」車を徐行させながら、懐中電灯で杉の枝にとまったフクロウを観察。自然遊学館に展示してあるコミズクより、ずっと大きく、まるい感じがします。フクロウはネズミを狩る鳥です。きっとこのあたりにはネズミが多くすんでいるのに違いありません。幸先がいいねえと話しながら車を進めると、19:50、ほの字の里の前を走るまるいお尻。「タヌキだー」。そして箱谷にはいった20:00、休耕田から林に向かってニホンノウサギがはねていきました。

夜の蕎原は生きもの観察に最適です。ただし、彼らをはねないようにご用心！（西澤）

11月4日 蕎原ほの字の里北側の水田脇を通る道路上で、衰弱して動けない状態のコカマキリ♀緑色型を1個体採集しました。コカマキリは褐色型がほとんどで、緑色型はなかなかお目にかかることができません。私自身は、堺市東山の水田に囲まれた休耕地で

1993年9月15日に緑色型♀を1個体採集して以来のこととなりました（大阪府大・農・昆虫、所蔵）。チョウセンカマキリの調査では、水田周辺の生息場所で緑色型の割合が高いという結果が得られているので、コカマキリもそうなのかもしれません。今回は、標本が完品でなく、しかも生態写真を撮影できなかったことが残念です。

北隆館の「原色昆虫大図鑑Ⅲ」では、コカマキリ♀の緑色型の写真が、誤って「ウスバカマキリ」として扱われています。専門家も存在を忘れてしまうほど、コカマキリの緑色型が少ないということかもしれません。そのせいで、「採集したものはおそらくウスバカマキリだと思うけど、図鑑で見ると違うようだし、確認して欲しい」という依頼を何回か受けたことがあります。京都教育大学の松良俊明先生からは、「図鑑に載せるために撮影された標本がウスバカマキリでないことを愛媛大学に行って確認してきた」と聞きました。（岩崎）

11月11～12日 貝塚市立第五中学2年生の男子生徒4名、12月16～17日は久米田高校1年生の女子生徒3名が職業体験実習に来ました。飼育展示している生きものたちの世話を中心に標本の整理や自然生態園の調査などを体験してもらいました。今まで来館者として見学していたように受身の姿勢ではなく、来館者を迎える逆の立場にたって働くということでもちよっぴり緊張気味なようでしたが、積極的なまなざしで取り組んでくれました。（山田）

◆おしらせ◆

近木川写真展

2月14日(月)から3月7日(月)まで、浜手地区公民館において、近木川の様子やそこで遊ぶ子供たちを撮影した写真を展示します。

特別展「貝塚の植物 食用・薬用」

2月25日(金)から3月14日(月)まで、山手地区公民館において、貝塚市に生える有用植物を紹介する特別展を行います。これは2004年の秋に当館多目的室で行ったものを再展示するものです。

大阪府「私の水辺」大発表会

子供たちが日頃の水辺での取り組みや想いを発表します。貝塚市からも「自然遊学館わくわくクラブ」「こどもエコクラブ近木っ子探検隊」「南小学校河童クラブ」の3チームがエントリー。気軽にご来場下さい。

泉南地域展示会

1月22日(土)～28日(金)

於：関空交流館(木曜休館)

泉南地域大発表会

2月5日(土)14:00～17:00

於：山手地区公民館

自然遊学館の観察会は貝塚市内外問わず、参加できます。今後の予定につきましては、貝塚市広報、および自然遊学館ホームページ上にて順次お知らせします。参加希望されます場合は、電話・ファックスまたはメールでお気軽にお申し込み下さい。また、ホームページでは1月7日から「自然遊学館だより」第1号から第25号までの主な記事を掲載します。ぜひご覧下さい！

自然遊学館だより 2005 冬号 (No. 34)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 0724 (31) 8457

Fax. 0724 (31) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.osaka.jp

<http://www.city.kaizuka.osaka.jp/shizen/index.htm>

発行日 2005. 1. 5

この小冊子は市内印刷で作成しております。